

学	が		思	っ	と	う	あ	い	に	に	茂	四	本	瀬	日	か			
三	し	「	っ	て	い	と	の	朱	架	私	る	十	三	美	の	り	こ		
年	た	大	て	い	い	、	集	塗	け	の	見	メ	大	林	小	の	の		
生	い	き	い	る	の	そ	落	り	ら	心	事	ー	美	を	旅	母	春		
の	「	く	る	人	も	の	は	の	れ	を	な	ト	見	を	行	を	、		
頃	と	な	か	の	、	橋	陸	橋	た	強	杉	ル	る	置	に	置	父		
で	私	っ	ら	た	私	の	の	な	一	く	林	の	い	い	出	と			
あ	が	た	あ	め	は	存	孤	の	本	引	だ	一	て	て	か	私			
る	思	ら	る	に	将	在	島	だ	の	き	っ	つ	、	け	け	は			
。	う	、	。	用	来	が	に	が	橋	つ	た	、	あ	た	た	、			
た	よ	何		水	、	強	な	、	だ	け	。	樹	る	。	。	高			
だ	う	か		路	貧	く	っ	「	っ	た	と	齡	。		知	知			
そ	に	人		や	し	胸	て	こ	た	の	こ	三	魚		県	馬			
の	な	の		橋	い	に	し	の	。	は	ろ	百	梁		の	路			
時	っ	役		を	国	迫	ま	橋	何	、	が	年	瀬		馬	村			
は	た	に		造	に	っ	う	が	の	山	、	以	美		広	に			
ま	の	立		り	行	て	な	な	変	あ	そ	上	林		が	一			
だ	は	っ		た	っ	き	。	け	哲	い	れ	、	は		治	泊			
漠	、	仕		い	て	た	」	れ	も	の	ば	、	日		っ	二			
然	小	事		と	困	。	思	ば	な	村	上	日	日		た	二			

とした希望のよなもの、具体的なもので、
はなかった。ところが、中学一年の時、アナ
ウンサーの人に、「将来の夢は何ですか。」と
聞かれて、「貧しい国に行っていて困っている人
のために橋を造ることです。」と答えた時から
漠然としていた私の夢が形になり始めた。
そして、去年の夏、さらに「用水路も造り
たい」という夢が加わった。愛媛県まで聞き
に行った、ペシヤワール会現地代表の中村哲
さんの講演がきっかけだった。
中村さんは医者で、一九八四年からパキス
タンの辺境の地で、ハンセン病の治療を柱に
した貧しい人達の診療に携わる一方、八六年
からはアフガン難民のために、山岳地帯での
巡回診療も行っている。さらに、大千ばつが
アフガニスタンを襲った二〇〇〇年以降は、
水源確保事業も実践している。医者である中
村さんは、人を生かすために井戸を掘り、今
や用水路の建設作業員となっていて働いている。
そんな壮絶な生き方をしている中村さんだ

然による改善を期待して待つ』か、あるいは『偶
すすべもなく悪化を待つ』か、あるいは『偶
父と母は十月の検査までの四か月間、『為
ていれば手術を考えましよう。』と言われた。
の先生から、『十月に定期検査をして悪化し
今年の六月、主治医である香川大学付属病院
具を着けて悪化を防ぐしかない。』ところか、
分からないので治すための治療法はなく、装
以外、寝る時も器具は着けたままだ。原因が
を着けた生活をしている。体育とお風呂の時
生の時に病気が見つかり、六年生からは装具
曲がる病気で、原因は不明である。小学五年
実は、私は特発性脊柱側弯症という背骨が
に用水路造りが加わった瞬間だった。
だけが持つ意味の重さに圧倒された。私の夢
はそれを聞いて深く感動すると同時に、事実
でもなく、現地の状況を淡々と語られた。私
を述べるでもなく、自分の考えを押しつける
ろうと思っていたら、全く違っていた。教訓
から、さぞかしドラマチックな話をされるだ

先生が病気だけでなく、私という人間を見て	てのことだろう。そして何より先生の話から	と、いう上下関係を何とか取り払いたいと考える	瀬本先生が白衣を着ないのは、医者と患者	ギリまで悪あがきをしよう。」と言った。	それまでできることをいろいろ試して、ギリ	よう。それから、手術は来年の夏にしよう。	ない。中三なんやから、まず受験を乗り越え	かって、「側弯のためだけに生きているんや	と受け入れることができた。そして、私に向	れた。深刻な話も大阪弁で言われると不思議	られないだろう。」ということを大阪弁で言わ	は私のレントゲン写真を見て、「手術は避け	者の象徴である白衣を着ていなかった。先生	ンのカーネル・サンダースにそっくりで、医	瀬本先生は、ケンタッキーフライドチキ	専門医である瀬本喜啓先生にたどりついた。	先生を探すことにし、滋賀県にいる側弯症の	そこで、セカンド・オピニオンを依頼する	したくないと考えた。私も同じ思いだった。
----------------------	----------------------	------------------------	---------------------	---------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	-----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	--------------------	----------------------	----------------------	---------------------	----------------------

いるんだというところが私にはよく分かった。
私は病気のせいで自分を不幸だと思っただこ
とはない。それは、父や母を見て育ってきた
からだだと思う。父も母も困ったことに直面し
ても、愚痴を言ったり、誰かのせいにした
はしない。『嘆いたり、悔んだりする暇があ
ったら動け』というのが父の持論である。お
かげで私も「何をどう考えて、どのように立
ち向かうべきか。私にできることは何か。」を
考えることが当たり前になった。そして、そ
れは私に、物事の表面だけを見るのではなく、
その本質を見極めようとする態度をも育てて
くれたように思う。そういう意味でも、病氣
は私を鍛えてくれたと思う。骨はち
「たとえ君がアフリカで死んでも、
やんとアフリカの地に埋めてやるから安心せ
い。」と父は言う。私としては「できたら死に
たくはないな。」と思う。しかし、だからとい
って船出を前にして足がすくんでしまいうよう
なことだけはしたくないと思っ
ている。